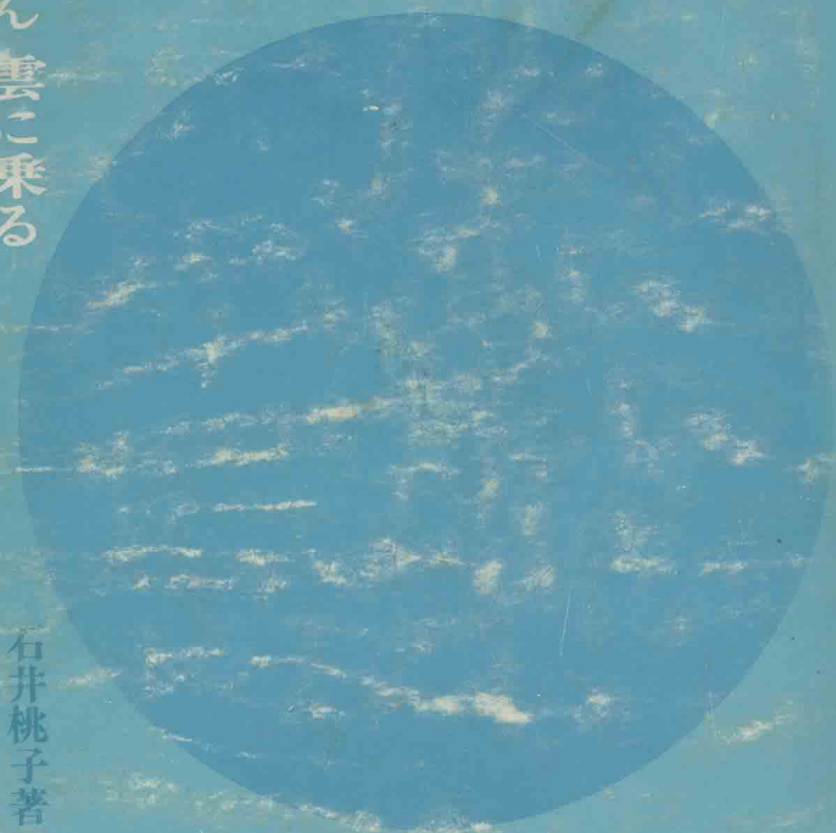


ノ
ちゃん
雲こ乗る

石井桃子著 中川宗弥画



ノンちゃん
雲に乗る



石井桃子 著
中川宗弥 画



©Momoko Ishii 1967

ノンちゃん雲に乗る

一九六七年一月二〇日 初版発行
一九八〇年一〇月三十一日 第三〇刷

著者 石井桃子

発行 福音館書店

郵便番号 一〇一

東京都千代田区三崎町二丁目一番九号

☎(〇三三)九二一三四〇一／振替東京五一七六四五

印刷 精興社

製本 積信堂

◆無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内にこわれたような本がございましたら、おそれいりますが、本社にご返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

◆NDC 九一三／二七八ページ／一九×一四cm

目次

ある春の朝	一
雲の上	二七
ノンちゃんのお話	
1 ノンちゃんの家	四九
2 おとうさん	六五
3 おかあさん	七七
4 おかあさんつづき—にちゃんのよくばり	九五
5 にちゃん—にちゃんのあだ名	一二三
6 にちゃんつづき—にちゃんぶたれる	一二七

7	にいちちゃんつづきーにいちちゃんのいじわる……………	一四五
8	にいちちゃんつづきーにいちちゃんとエス、 にいちちゃんとうそつき……………	一六一
9	ノンちゃんのある日……………	一八一
おじいさんのお話		
1	ある日のにいちちゃん……………	二〇七
2	ハナ子ちゃんの冒険……………	二二七
小雲に乗って……………		二三三
家へ……………		二四六
それから……………		二五九

ある春の朝

いまから何十年かまえの、ある晴れた春の朝のできごとでした。いまだいえば東京都、そのころでは東京府のずつとずつと片すみにあたる葛蒲町という小さい町の、またずつとずつと町はずれにある氷川様というお社の、昼なお暗い境内を、ノンちゃんという八つになる女の子がただひとり、わあわあ泣きながら、つうつうはなをすすりながら、ひょうたん池のほうへむかって歩いておりました。

この女の子が、どんな子どもかということをおわかっていただくために、まずおことわりしておかなければならないことが、一つあります。それは、この子が、いつもはけっして「泣き虫」でもなければ、また、子どもの威厳をこのうえもなく傷つけるあのおそろしい伝染病、「はなたらし」にもかかっていなかったということです。ノンちゃんは、そんな子どもではありませんでした。なにしろ、あさってからは、級長なのです。

けれども、長いあいだ、泣いていれば、どういうことになるのか、ノンちゃんは泣きだした

あとで気がついたのです。じぶんながらみつともないと思いました。けれども、しかたがありません。ノンちゃんは泣かなければなりませんでした。

わけというのは、こうでした。その朝、ノンちゃんは、その日のおてんとうさまとおんなじくらい、はればれと目がさめたのです。

トントン、トントン、トントントン……

お勝手で、おかあさんが、おみおつけのダイコンを切っている音がしました。ノンちゃんの胸が、なんともなく、うれしさでぶうとふくれました。まな板の上にもりあがる、水をふくんだまっ白い、四かくい、細い棒の山を心にえがきながら、ノンちゃんはもう一度、目をつぶって、ぼうと、朝寝のあと味をたのしんでいました。

ダイコンのおみおつけ……二日つづきのおやすみ……トシ子おばちゃんが泊まりにきてる！ つぎつぎに浮かんでくるのが、うれしいことばかりです。

「おとうさん？」床の間のほうで、カサカサ、新聞をおりかえす音がしたので、ノンちゃんはパツチリ目をあげ、そっちへ背中をむけたままききました。

「うむ。」と、おとうさんの重い返事がします。

「きょうは釣りにいかないの？」

「いこうかね……もう少ししたら。」

めずらしいなど、ノンちゃんは思いました。

ノンちゃんの家では、お休みのまえの晩には、何かよほどかわったことのないかぎり、おかあさんが大きいおむすびを五つづつすることになっていました。そして、つぎの朝、ノンちゃんたちが起きだしてみると、家の中にはおむすびもなければ、おとうさんもいません。けれど、おむすびとおとうさんが、どこへ行ってしまったんだらうなどと心配する者は、ひとりもないのです。お休みになれば、おとうさんは夜の明けるのを待ちかねて、おむすびをふところに、そっと家を出ていくのだということは、ノンちゃんたちには、おかしいけれども、あたりまえのことになっていました。ですから、そんな日に少しでも早く、おとうさんにあいたい人は——そして、それはたいいノンちゃんでしたが——夕方、日の沈むころ、門のところに立っていればいいのです。そうすれば、おとうさんは、こじきとまちがわれそうなようすをしてではありましたが、かならず帰ってきました。

「おとうさん、釣れたア？」ノンちゃんは、遠くからどなります。

おとうさんは、

「うん。」ということもあれば、「だめだったよ。」ということもあります。

おとうさんは、どっちでもいいような顔をしています。ノンちゃんだって、おとうさんさえ帰ってくれば、どっちでもかまいません……。

きょうは、おとうさんとこへ、会社のお友だちでも来るのかな？

ノンちゃんは、うーんーと、ゆっくり寝がえりをうちました。そして、床の間のおひなさま——それは、おかあさんの小さいときの習慣どおり、旧のお節句にかざってから、なごりおしいままに、むりにもう二十日もおすわり願っているのですが——に、にっこりあいさつしてから、いちばんおくのおとうさんに話しかけようとして、もう一度、おや、と思いました。

にいちちゃんの寝床は、もぬけのからでした。

「にいちちゃん、もう起きたの、おとうさん？」

「ああ。」

「おどろいたー 雨がふっちゃうから！」と、ノンちゃんは、おおげさにいいました。

にいちちゃんは、いつもいちばん寝坊で、二度も三度もおこされてから、みんながごはんをたべはじめるとき、ようやく起きてくるのです。

「もういいかげんふったから……やんだよ。きょうは、いいお天気だ。ノツコミにいいぞ……。ふわっ！」おとうさんは笑いながら、あくびまじりにいいました。

なるほど、三、四日ふりつづいた雨は、きのうの夕方、やんだばかりです。

ノンちゃんも、クスクス笑いなから、

「じゃ、こんど、遠足のとき、にいちちゃんのこと、てるてるぼうずにしちやえばいいねー」

「ふふふ、おとなしくぶらさがるかな？」

「だって……にいちやんだって、遠足にいくんだもの、ギセイになるよ。でも、にいちやんだと重いから、ナンテンの木じゃ、だめね、おとうさん？……そうだ、カキの木がいいや。カキの木とナンテンと似てるでしょう、おとうさん？ カキの木とナンテンと親類？」

「そうじゃないだろう。」

ノンちゃんはそんなふうに、しばらくのあいだ、新聞を読んでいるおとうさんに話しかけ、また歌をうたったりしたのですが、いっこうにおかあさんが「ノンちゃん、もう起きてもいいよ。」といわないものですから、やがて、ひとりで起きだしました。

茶の間はきれいに片づいていて、おかあさんのかっぱう前かけをかけたトシ子おばちゃんが、ぼんやり、ちゃぶ台の前にすわっていました。

「おばちゃん！」

おばちゃんは、うしろからとびついたノンちゃんの両手を、おんぶのときのようにつかまえて「ノンちゃん、唱歌しようぜねえ。いまの『太平洋』、とてもうまかった！ もうあんな歌、二年でおそわるの？」

「ううん、おかあさんにおさったの。」

「ああ、だからね……。さ、早く顔あらっていらっしやい。おみおつけが煮つまるから。」

ノンちゃんはいそいで湯殿から歯ブラシやタオルをとってくると、庭へとびだしました。おとうさんもすぐあとから来たので、いっしょに井戸ばたで顔をあらい、それから、からだをそらして深呼吸をしました。

雨あがりのしっとりした空気のなかに、芽をふいたばかりの氷川様の森が、大きなおふとんのように、やわらかくお社をつつんでいます。その大きなおふとんの上へ、大きな大きな針のように、よきによき、つきだしているのは、枯れたスギの木のとっぺんです。そこらじゅうに、土のいいにおいがしました。

深呼吸がすむと、ノンちゃんは、またいそいでタオルと歯ブラシを湯殿へかえし、頭をなでつけてから、さっぱりした顔でちやぶ台の前へすわりました。

「おはようございます！」と、まずおとうさんとおばちゃんにいい、それから、お勝手へどなりました。

「おかあさん、なにしてんの？ みんなもうすわったのよ。にいちちゃんだけいないけど……。」おばちゃんが、チラとおとうさんを見ました。が、すぐ、おみおつけのなべのふたをとると、中のみをノンちゃんに見せて、

「ほら、ダイコンよ。ノンちゃん、ダイコンのおみおつけ、大すきなんでしょ？ おばちゃん、たアくさん入れてあげたわ。」

ノンちゃんの目と口が、パツとあきました。「おかあさんは？」

おばちゃんは、またチラとおとうさんを見て、こまったように、

「あの……おかあさんね、ちよつとご用ができて、東京へいらしたの……。」

ノンちゃんは、目をまるくしたまま、しばらくじつとしていましたが、やがて、少しふるえる声で、「四谷で……だれか病氣？」

おばちゃんは笑いました。

「いいえ……、でもね、ノンちゃんたち、どんどん大きくなるでしょう？　だから、買いものがいっぱいたまっちゃったんですって。でも、おおいそぎですまして、あかるいうちに帰ってきますって……。」

「にい……ちゃん……は？」と、聞いたノンちゃんの声は、まえよりもふるえていました。

「タケちゃんもいったの……。」

ノンちゃんはどうつむいて、ごはんをたべはじめました。

おばちゃんはなぐさめました。

「おかあさんね、ノンちゃんがちよつとあそんでるまに帰ってきちゃうんだって。暗いうちに、お茶づけたべて出てらしたのよ。だから、おばちゃんと何かしてあそんでましよう。……タケちゃんだけお泊まりして、あした、おじいちゃんに送ってきていただくの。いいでしょう？」

ノンちゃんはごはんをたべながら、ほっぺたがつれたり、口がまがってきたりするのでこまりました。泣いてはいけないと思いました。

けれども、ときどき、のどがきゅつとつまり、せきといっしょに涙かでてきそうになったりするのです。

でも、とにかく、いつもどおり、二はいたべおわかりました。そして、いつもどおり、お茶わんをお勝手にはこぶ手つだいをはじめると、おばちゃんが、おとうさんに見えない障子のかげにしゃがんで、

「ね、ノンちゃん。」と、ノンちゃんの肩に手をかけました。「いいでしょう、おばちゃんがいるんだもの？」

ノンちゃんの顔をのぞきこんだおばちゃんの目も、なんだか泣きそうでした。

「うわあッー」ノンちゃんは、一度に胸がやぶれたように泣きだしました。

「うわあノ!!」

いつのまに、ノンちゃんはそのへいだったのでしよう。気がついたときには、ちゃんとげたをはき、庭さきで釣り道具をいじっているおとうさんの前につたって、天を仰いで泣いていました。

「うわあー わあわあわあ……。」

一度に、いろんなことが思いました。にいちやんがこの二、三日、わけもないのに、急にニコニコしたり、しきりにお天気を気にしたり、おかしいほどおかあさんのいうことをよくきいたりしました。それから、きのう、おとうさんが会社のかえりに、トシ子おぼちゃんをつれてきました。おおよるこびで、はしゃいでいるノンちゃんを、みんながとてかわいがってくれました。みんなで……みんなで……ノンちゃんをだましていたのです！

それなのに、あのダイコンを切る音を、おかあさんだと思って、安心して歌なんかうたって……。

お茶わんだって三つきりならんでいなかったけど、だまっていたのは、みんながそんなことするとは思っていなかったんだ……。

「うわあッー わあわあわあ……。」

おとうさんはそれでも、だまって釣りのしたくをしていましたが、ノンちゃんがあまり勇敢に泣きたてたためでしょうか、顔をあげると、ちよっとおかしそうに口をまげました。

笑わば笑えー そんな気もちで、ノンちゃんは口をあげっぱなしにして泣きつづけました。かなしくって、くやしくって、胸もはりさけそうです。だれだ、だれだ、だれだ、こんなわるいことをしたのは！

そのうち、とうとう根まけしたのか、おとうさんは手をはすと、ノンちゃんの腕をつかん

で引きよせました。それから、腰の手ぬぐいはずすと、ノンちゃんの鼻をつまみ、

「チン！ としろ。」

ノンちゃんは、チン！ としました。

はながあとからあとから、ひっきりなしに出したのは、このころからです。

おとうさんは、その手ぬぐいで、ほかのところもなでまわしながら、

「なんだい、ノンちゃん、おかあさんが東京へいったぐらいで、二年生が……級長がそんなに泣いてどうする？ おかしいぞ。」

「あた、あた、あたしにだま、だま、だまっていっちゃったあ……。」

「いいじゃないか。すぐ帰ってくるとさ。おばちゃんとおとなしく待っていい。」

おとうさんは、さもなんでもなげにいました。

ノンちゃんは、なまぐさい手ぬぐいを振りはらい、

「にい、にい、にいちちゃんはつれてったあ……。」

「ああ、にいちちゃんは、こないだ、発明展覧会を見にいこうって、春ちゃんから手紙がきたからね。おまえ、そんなとこへいったって、しかたがあるまい？　うちで、おばちゃんとあそんでるほうが、どのくらいいいかわからない。」

そして、おとうさんは、この説明で、ノンちゃんにすっかりわけがわかってしまったかのよ

うに、えさ箱げのなかをのぞきはじめました。

けれど、ノンちゃんは、まだちつともわけがわかってなんかいません。

「二、二、二年になったら、き、きつとあたしもつれてくつて、いったんだ……。おかあさん、うそつきだあ……。」

この最後さいごのことばが口を出たとたん、ノンちゃんはどうしていいかわからないくらいかなしくなり、腰こしをまげ、地じだんだふみながら、ほえるように泣なきました。

「お、お、おかあさん、うそつきだあ……。」

ノンちゃんか、おかあさんについて、こんなおそろしいことをいったのは、生まれてこれか
はじめてです。さすがにノンちゃんも、いそいで、まぶたで涙なみだをはたきおとすと、横目よこめでおと
うさんの顔をうかがいました。

おとうさんは聞きこえないふりをしていました。

ノンちゃんは勇気ゆうき百倍ひゃくばいし、「にい、にい、にいちちゃんのばかあ、ばかあ、ばかあ……。」

おとうさんの手がのびて、ノンちゃんはむりに引きよせられました。そして、また鼻はなをつま
まれました。さて、それかすむと、おとうさんは、少しこわい声で、けれども、しずかに、

「ノブ子、おまえ、わからないな。にいちちゃんかわるいんじゃない。おとうさんかおまえはつ
れてかないほうがいいといったんだ。あんなごみこみしたところ、なにがいい。また病気にな

つたら、どうする。」

「なりませんようー もう学校へいってから、お休みしたことなんかありませんようー」

「それは、みんなでおまえのことを気をつけてるからだ。」

「うそだあー にいちゃんなんか、気をつけてくれたことなんかないやあ……。」

おとうさんは、あきれたように横をむきました。

「そんなにわからないやつは、泣いてろ。」

「泣いてますよう、あああああ。」

そして、ノンちゃんは泣いていました。

お勝手で朝ごはんのあと片づけをしていたおばちゃんが、それからしばらくして出てきたとき、おとうさんのだまりつくとノンちゃんの泣きつくらは、まだつづいていました。おばちゃんは、ノンちゃんのそばへしゃがむと、またはなをかみ、涙をふいてくれたうえで、

「ね、ノンちゃん、そんなに泣くの、およしなさい。もうおかあさん、とつくに四谷へついちゃってるのよ。泣いてもどうにもならないわ。ね？ それより、おばちゃんとどこかへ遠足にいきましょうよ。」

「それは、いいな。」と、おとうさんが、あいづちをうちました。

けれど、ノンちゃんは泣きつづけました。